日本建築学会九州支部研究報告
第37号　1998年３月

旧貝島六太郎邸の建設の経緯について
－ 貝島家の住宅について（その１）－

○ 正会員 松岡　高弘[1)]
同　川上　秀人[2)]

１．はじめに

福岡県鞍手郡宮田町に所在する旧貝島六太郎邸は木造平家建、一部２階建、延床面積1295.4㎡の大規模な住宅である。貝島六太郎は太助の弟で、嘉永５年12月12日に、永四郎と夕子との３男として生まれた。昭和10年３月11日に84歳で死去した。太助とともに炭坑経営に従事した。

貝島家は麻生・安川と共に「筑豊御三家」と称された地元大手資本の炭鉱経営者であった。貝島家は９家に別れ、それぞれ大規模な住宅を構えていたと推測され、炭鉱主に関連する住宅を考察する上で重要な位置を占めるものと考えられる。但し、現存する住宅は２棟しかなく、旧貝島六太郎邸は貴重な建築と言える。当住宅には後世の増改築や昭和53年の福岡市内への仏間の移築等の変更はあるが大正５年完成時の姿を伝えている。また、建設に関わる資料が多数保管されている。本稿では資料に基づきながら建設工事の経緯について述べる。

２．貝島家

貝島家は貝島太助を中心にして、大之浦炭坑・大辻炭坑等を経営していた。筑豊以外では佐賀県の岩屋炭坑を所有していた。以下、貝島家に関わる主たる事業を「貝島会社年表草案」に拠りながら述べていく。

明治31年５月15日に貝島鉱業合名会社を創立し、社長に貝島太助、社員に貝島六太郎・貝島嘉蔵・貝島太市が就任した。明治42年12月１日には同社を株式組織に改め、貝島鉱業株式会社が設立された。専務取締役社長に貝島太助、常務取締役副社長に貝島栄三郎、取締役に貝島栄四郎・貝島嘉蔵他、監査役に貝島六太郎他、が就任した。大正５年11月１日貝島太助の死去に伴い、29日に役員の異動を行い、専務取締役社長に貝島栄四郎、常務取締役に貝島健次・貝島太市、監査役に貝島嘉蔵・貝島六太郎、が就いた。大正８年11月３日に貝島合名会社（代表業務執行社員会長貝島栄四郎）及び貝島商業株式会社（取締役社長貝島太市）を創立し、直方に本社を構えた。大正９年10月17日に両社の本社は下関に移転した。大正10年２月１日に大辻岩屋炭礦株式会社（専務取締役峠延吉）を設立し、大正12年12月19日に貝島木材防腐株式会社（社長貝島百吉）、大正14年11月３日に貝島乾餾株式会社（社長貝島健次）・貝島石灰工業株式会社（社長貝島蘭策）及び貝島林業株式会社（社長貝島永二）を設立した。昭和６年８月３日貝島鉱業(株)は貝島商業(株)と大辻岩屋炭礦(株)の２社を合併し貝島炭礦株式会社（社長貝島太市）に商号を変更し、貝島乾餾(株)と貝島石灰工業(株)を合併して貝島化学工業株式会社（取締役社長貝島健次）が設立された。昭和25年９月28日に大辻炭礦株式会社（取締役社長貝島健次）が設立された。

大之浦炭坑は筑豊最後の山で、昭和48年11月閉山した。昭和36年から操業の露天掘も昭和51年８月に終わり、筑豊から完全に炭坑が姿を消した。

３．貝島家の住宅

明治42年10月家憲が制定された。家憲では貝島一族を９家に分けて、貝島太助を宗家、貝島六太郎と貝島嘉蔵を本家、貝島太市・貝島亀吉・貝島定二・貝島永二・貝島百吉及び貝島シゲノの６家を連家とし、区別した。

各家の邸宅の位置及び建設費に関しては一族会の議決を経なければならなかった。家憲に関連する書類に

貝島各家住宅建築豫定額

一	拾貳萬圓	宗家	貝島太助
一	六萬圓	本家	貝島六太郎
一	五萬円	本家	貝島嘉蔵
一	三萬五千円	連家	貝島太市
一	貳萬五千圓	仝	貝島亀吉
一	貳萬五千円	仝	貝島定二
一	貳萬圓	仝	貝島永二
一	壹萬五千円	仝	貝島百吉
一	壹萬五千圓	仝	貝島シゲノ

とあるが、金額に大きく×を入れている。これとは別に

貝島各家住宅建築豫定額

一	拾七萬圓	宗家	貝島太助
一	九萬圓	本家	貝島六太郎
一	八萬圓	本家	貝島嘉蔵
一	五萬圓	連家	貝島太市
一	参萬五千圓	連家	貝島亀吉
一	参萬五千圓	連家	貝島定二
一	参萬圓	連家	貝島永二
一	参萬圓	連家	貝島百吉
一	参萬圓	連家	貝島シゲノ

1）有明工業高等専門学校・助教授・工博　2）近畿大学九州工学部・教授・工博

とあり、建築予定額が増加している。

貝島宗家は香井田村百合野に大正２年春に完成し、嘉蔵の住宅は直方町西尾に建設され、大正４年５月16日に披露宴を行っている。六太郎の百合野本家は大正５年４月23日に披露宴を行っている。太市は大正８年10月に直方から長府に転居している。その他の連家の住宅については現時点では不明である。

９家の住宅の中で現地に建つのは六太郎邸(図-１）のみで、嘉蔵邸は昭和２年に直方から福岡市に移築された。

ところで、明治40年５月３日に「井上伯、百合野貝島家にて梅樹二株を記念に植樹」とあり、宗家・百合野本家が完成する以前に住宅が存在していたことが解る。

４．建設の経緯

蓋に「大正五年四月廿三日　上棟式　宴会ニ関スル書類在中　貝島旧宅」と記された箱がある。その箱の中の書類の一つである『委員名簿』の表紙には「新築落成紀念 TAISHO 5.4.23」のスタンプが押されている。当住宅がこの時に新築落成披露宴を行ったことが解る。

住宅の完成時期は以上の資料で確認し得る。また、工事に着手した時期、工事の経緯は旧貝島六太郎邸所蔵の資料中の『総(總)勘定元帳』(以下『元帳』と略記する）から把握される。『元帳』には各種の支払いの時期や金額、対象となる人物名等が詳しく記されている。

（１）敷地

明治45年の元帳に該当する書類中の「家屋」から香井田村竜徳に143坪の住宅と36.5坪の土蔵、27.5坪の社宅等を所有していたことが解る。大正２年２月末日の『戝産目録』の「地所代明細書」には香井田村の2.709反のみが宅地として挙げられており、ここに143坪の住宅が建っていたと推定される。ところが、大正２年度の『元帳』の「地所代」を見ると香井田村には上述の宅地に該当する「宅地」2.709反以外に香井田村竜徳の山林の中の89.222反を「邸園」として特記する。

大正３年度の『元帳』の「地所代」には「香井田村宅」が2.709反、「香井田村竜徳 庭」が89.221反とある。大正４年度の『元帳』の「地所代」には「香井田村 宅地」が2.709反、「香井田村大字竜徳 邸園」が89.221反とある。そして新築披露を行った大正５年の『元帳』の「地所代」には「香井田村 宅地」が2.709反、「香井田村竜徳 邸宅」が89.221反とある。

上述したように、現住宅の建設以前に竜徳には2.709反の敷地に143坪の住宅と36.5坪の土蔵、27.5坪の社宅が建っていたが、従来から所有していた山林を宅地に整地して約33倍の89.221反の敷地に２倍の建坪を有する290坪の住宅を新築したと推定される。

（２）大正元年度

工事は明治45年には始まっている。大正２年度の『元帳』の「住宅建築ヒ」の冒頭に「大正元年末計住宅建築ヒ」が534.64円とある。大正元年度の「改築(家屋)ヒ」を合計すると517.89円となり上記金額と一致しない。

最初の支払いは明治45年６月30日の「庭石三ケ及運搬賃」であり、以後「植木人夫」・「植木代」・「庭石代」等が主な支払いで、建物本体の工事には入っていない。

（３）大正２年度

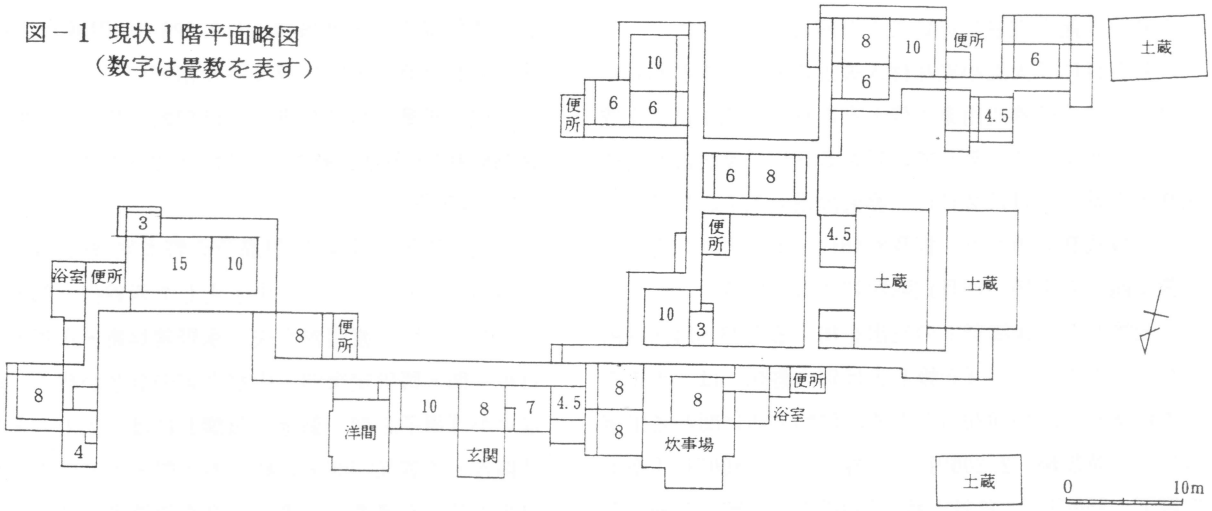
大正２年４月に「篭塀改造大工賃」、「土蔵土台石切リ石工賃」や「土蔵改築材木代」、「土蔵改築大工賃」が支払われ、４月26日に「材料小屋大工」賃や「材木小屋用トタン運賃」、５月６日に「材木一切人吉ヨリ運賃」が支払われ、材木の購入・保管が始まっている。26日には「土蔵土台石下地堅メバラス代」、30日には「炊事場石切リ石工」の賃金が支払われ、基礎工事が行われ始めたと推測される。６月23日には「家屋圖面及設計料」30円を山西に支払っている。９月３日に「建築準備大工」の賃金が支払われ、４日に「仏壇受負金￥3250ノ内」200円を高田に支払い、早い時期から仏壇の製作にかかっている。11月12日に「建築ヒ前貸」として3,000円を讃井傳吉に渡し、29日に3,000円、30日に500円、12月25日に900円を渡し、大正３年１月25日には「栂売却代」2,295.25円の収入をそのまま渡している。１月18日に「大工小屋建大工」の賃金が支払われ、木工事に取り掛かるようになったと考えられる。

11月17日に「稲家増築ニ係ル人夫」の賃金、20日に「二号土蔵移転ヒノ内瓦取除ケ賃」、12月15日に「中二階移転地土工人夫賃」、大正３年１月29日に「仏間移転材木代」、30日に「仏間移転地土工人夫」の賃金、２月16日に「仏間移轉大工賃」・「仏間解キ賃」が支払われており、新築工事とは別に従来の住宅の一部を移築する工事が行われている。

炊事場は上記の移築建物や土蔵以外で最も早くから工事が行われ、２月17日に「炊事場解キ人夫」と「仮炊事場作リ」の賃金が支払われている。移築のため炊事場を解体し、従来の住宅に仮炊事場を設けたと推測される。

『元帳』の「住宅建築ヒ」の支出を加えると49,952.658円であるが、当住宅以外の支出を除くと47,647.423円となる。大正２年度には一～四号の土蔵、石工事、移築建物に関する支払いや木材の購入費が多く、大正２年度内

図－1 現状1階平面略図
（数字は畳数を表す）



に「一号土蔵十八坪」は完成した。

（4）大正3年度

大正3年3月には中二階・仏間等の移築工事が行われ、「男部屋引直シ大工賃」の支払いもある。

3月17日には「基礎工事人夫賃」・「柱石四十一ケ代」、31日に「基礎コンクリート形大工賃」、4月16日に「基礎胴突人夫賃」、18日に「基礎遣形大工」賃、5月12日に「床下漆喰七十九坪代」を支払い、基礎工事が行われている。4月28日に「上覆用建設ヒ」の一部を支払っており、仮設工事も行われていたと推測される。

6月15日に「本座敷側石運賃」・「炊事場敷石十七ケ運賃」・「炊事場井戸、便所煉瓦築賃」、7月17日に「玄関及炊事場敷石石工賃」、28日に「放レ座敷土台石代」、8月12日に「玄関石工」・「湯殿及沓石其他石工賃」、9月3日に「本座敷及茶ノ間タタキ漆喰賃」が支払われ、足元廻りの工事が行われている。8月12日に「炊事場湯殿煉瓦築左官賃」、11月30日に「本座敷及湯殿便処菊ノ間左官」、12月30日に「放座敷煉瓦積左官」の賃金を支払っており、左官工事も頻繁に行われている。

8月31日に「下湯殿及便所新築大工賃」、9月16日に「下便所及湯殿建大工」の賃金が支払われ、浴室や便所の木工事は記されているが、主要な部屋の木工事の記述はない。8月12日の「書院夏障子六枚代」、9月7日の「欄間代」等の雑作はあり、11月6日に「佛間畳代」、12月16日に「放座敷畳代金」を支払い、木工事が進んでいることは解る。11月30日に「大工十五名へ解雇ニ付心付」とあり、12月31日には「大工解散ニ付祝儀」を渡しており、木工事が終わりに近づいていることが窺える。

12月30日に「佛間天井生子張賃」、大正4年1月31日に「仏間持送リ彫刻賃」・「内陳組立用」の手袋代、2月28日に「仏間内陳組立用雑品代」を支払い、仏間は完成間近と推測される。

洋間に関しても木工事の記述はなく、基礎や石工事等から工事の進捗状況が解る。6月2日山本源四郎に「洋舘敷石購入ノ為ノ徳山出張ヒ用」を渡し、7月10日に「洋舘石材受負金」の一部、8月11日に「洋舘張瓦代」、12日に「洋舘石工賃」、10月21日に「洋舘キソ煉瓦積」が支払われ、基礎工事が進み、大正4年2月16日に「洋舘棟包及炊事場小門銅工」の賃金を支払い、20日には「洋舘ストーヴ一式」とあり、工事が進んでいることが解る。

ところで、『元帳』とは別の大正4年2月末日における『戝産目録』で「二、三号土蔵」と中二階であった「放レ家」が完成したことが解る。尚、二号土蔵は従来の住宅にあった土蔵を移築したものと推測される。『元帳』の「建築費」の支出を加えると78,197.734円となる。

（5）大正4年度

大正4年3月10日「十号十一号十三号棟漆喰左官賃」・「洋舘入口上塗賃」を讃井に支払っている。16日に「四号土蔵大工賃」を支払い、31日に「四号土蔵基礎石据」、4月1日に「四号土蔵前廊下用栂代」を中島に支払い、9月16日に「蔵ノ前廊下窓格子大工」等、四号土蔵に関する支払いが多く見られる。

4月15日に「放座敷壁塗直シ左官賃」、30日に「洋舘屋根直シ」、5月17日に「各所手直シ雑役大工」、31日に「本家各所手直シ変更」、6月20日に「本座敷浴場壁塗直シ」、7月1日に「仏間手直シ」、10月15日に「家根修繕左官」・「家根フキ直シ」等があり、竣工間際の状況であったことを窺わせる。

6月26日に「洋舘装飾家具代一切」、7月21日に「洋舘スレエート葺変銅工」、8月3日に「洋舘装飾品代」、13日に「洋舘横棚大工」、18日に「洋舘家根金物代」、9月16日に「洋舘戸棚大工」、12月28日に「洋舘装具代」

とあり、洋館も完成に近いことが解る。

10月５日に「大工小家片付人夫」の賃金が支払われ、12月23日に「遷佛式用菓子代」とあり、住宅がほぼ完成したことが窺える。そして、10月５日に「宴会設備山道開作人夫賃」、11月２日に「宴会設備大工」、12月３日に「上棟式宴会用トタン板及釘類代」等、翌年の宴会の準備に関わる事柄が10月以降記述されている。

『元帳』の「建築費」の支出を加えると33,954.979円となる。ところが、『元帳』とは別の書類では「大正四年度建築ヒ」が19,070円とある。建物本体に関わる工事費は「洋舘装飾」2,300円、「四号土蔵」1,800円、「仝上前廊下」850円、「参号土蔵」200円で、洋館と四号土蔵の工事が大正４年度までかかったことを示す。従って、住宅は大正３年度内には大部分が完成し、大正４年度は手直しを行い、洋館・四号土蔵とその前の廊下が大正４年度に完成し、290.2坪の住宅が竣工したことになる。

大正５年度の『元帳』の「家屋代」から、住宅以外に門・庭付属の建設物・放レ家・壱～四号土蔵・車小屋・男部屋・農場・神殿が建っていたことが解る。大正５年４月23日には新築披露宴を催し、「宴会ヒ」として6,811.455円を支出している。

５．建築費の変更

上述したように、家憲では建築予定額が初め６万円であったのが、明治42年には９万円に修正されている。

大正３年12月の日付がある「建築費明細表」では総工費が103,421.716円とあり、10万円を超過している。

大正４年度当初と考えられる「百合野本家建築費調」では、「大正四年二月末日迄本邸建築費」が99,535.877円で、その他の建築費を含めると104,360.642円となる。更に「大正四年度建築費豫算」として16,000円を計上し、大正４年度末では120,360.642円となる。しかし、「家憲ニ定メタル建築費」が９万円であるため、30,360.642円の超過となる。９万円内に抑えるため、「地所代増加補充」として1.5万円、配当金から２万円を補充し、計3.5万円を充当し、超過分からの差引残4,639.36円を９万円から引いた85,360.64円が「家屋建築費」とする案を出している。家憲で決められた金額の重要さが窺える。

『元帳』の各年度の建築費の支出は上述したが、それらの合計は16万円を超える。しかし、費目の振替や収入等があるため各年度末の建築費は支出とは異なる。年度末における累計は大正元年度末534.64円、大正２年度末34,577.557円、大正３年度末95,210.693円、大正４年度当初96,094.471円、大正４年度末87,468.108円である。大正４年度末は年度当初より8,626.363円減り、家憲で定められた９万円内に収まった格好になっている。

「住宅建築受負計算書」には契約当時273.4坪、変更後288.9坪とあり、最終的には290.2坪で完成した。

６．大工等

『大正四年十月参日　貝島百合野本家 新築落成披露宴會案内名簿』に「大工連中」として西谷作太郎・谷口伊平・高木三郎・渡邉善太夫・永野善兵衛・永畑長平・山口民一郎・岡田定次郎・山根久吉の９名が載る。年紀はないが『男子之部　御定人員調』には「大工」として讃井傳吉・芳賀又□郎・岩崎文左エ門と上述の西谷から山口まで７名を墨書し、更に５名を鉛筆書で挙げている。『名簿』の「大工連中」の中に讃井傳吉・芳賀又□郎・岩崎文左エ門の３名は無く、別の箇所に記されている。讃井と岩崎は「博多対馬小路」と住所が書かれ、芳賀は「福岡簀子町　芳賀弘」とあり、親子かと思われる。また、明治31年の堀三太郎邸の棟札に「石工頭梁」として名があった山本源四郎の名も記されている。

『元帳』では工事内容から支払った相手の職種が推定され、上記の大工や石工以外の名を見ることが出来る。

小屋組には番付以外に「拾月廿二日大正五年」・「永畑内横手亀市」、「横手亀一左官」等がある。大工永畑所属の左官横手亀市が披露宴後の大正５年10月22日に左官仕事をしたことを示している。

７．まとめ

旧貝島六太郎邸に残る『総勘定元帳』等の記録には住宅自体からは把握できにくい工事の経緯、金額、職人等が記されており、建設時の状況が解る貴重な資料である。

工事は明治45年に始められ、大正３年度は完成間近の状況であり、大正４年度には各所の手直しを行い、洋館と四号土蔵が完成して290坪の住宅が竣工した。新築だけでなく土蔵・仏間・中二階等、従来の住宅から移築され、転用された建物もあり、大正５年４月23日に新築披露宴を開催した。

謝辞

貝島化学工業(株)会長貝島義雄氏、社長貝島義朗氏、総務係長森芳興氏には住宅の調査の便宜を図っていただき、有明高専助手森山恵香氏、同学生西崎直嗣・村山実鈴・末吉美穂・池田祐介・安陪春香・藤田智子・高倉英彰、近畿大学大学院生日隈康喜、同学生高畑秀の各氏には実測を手伝っていただいた。ここに記して感謝の意を表します。尚、本稿は文部省科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号09650707、研究代表者川上秀人）による。